

協力的過ぎる人は集団から排除されるか—日本における Parks & Stone(2010)の追試による社会差の検討

氏名：高橋優

指導教員：結城雅樹

協力は一般的に望ましいことである。では、協力的な人は周りの人に受け入れられるのか。これまでいくつかの実証研究において、驚くべきことに協力的な人が他者から厭われ、排除されたという結果が明らかになっている(Herrman et al, 2008)。本研究では、協力者に対する評価の社会差について検討した。当然の様だが、協力者は、周囲の他者や集団全体に利益を与えるため、賞賛される(e.g., Van Vugt Snyder, Tyler, & Beil, 2000, Van Vugt & Samuelson, 1999)。この賞賛を得たいがために、人々の間で周りよりも協力的であることをアピールし合う協力競争が起こる。この競争的利他主義は、協力競争は集団内の協力関係を促進し、結果的に集団を発展させるため、喜ばしいことかもしれない。しかし、Parks & Stone(2010)で示されているように、協力競争は場合によっては迷惑なものとして嫌われてしまうのである。本研究では、この協力競争が敬遠される理由として社会生態学的要因の一つである関係流動性(Yuki et al, 2007)が影響しているのではないかと考え、検証した。関係流動性は、対人関係形成機会の多寡と定義されており、これまでの実証研究から、北米において高く、東アジアにおいて低いことが示されている(山岸, 1998)。過大協力者が、競争によってより望ましい対人関係を形成できる高関係流動性社会では容認される一方で、対人関係が固定し、競争を回避しようとする低関係流動性社会では過大協力者が否定的に評価されるという予測を立てた。この予測を検証するために、過大協力者が否定的に評価されたということを行動実験によって示した Parks & Stone(2010)の追試を日本で行った。その結果、過大協力が最も好意的に受け入れられ、過大協力者に対する評価に社会的な要因が見られなかったという予測と逆の結果が得られた。また、Parks らの知見も再現することができなかった。追試の再現に失敗し、予測に反した結果になった理由として、二つの理由が考えられる。一つ目は、本研究では参加者間のやりとりを排除した実験デザインに沿って匿名状況で実験を行ったのに対して、Parks らの研究の匿名状況の操作に不十分な点があったために参加者同士に暗黙の規範が生まれていたことが挙げられる。そして二つ目は、上述の通り参加者間のやりとりを排除した実験デザインであったため、協力競争が起りにくかったことである。このことから、本研究は過大協力者が否定的に評価される要因として、参加者間のやり取りや規範の認識が重要であるということを示唆している。